

「トロアスからミレトスへ」

2016年08月12日

使徒言行録 20 章 13 節～16 節。さて、わたしたちは先に船に乗り込み、アソスに向けて船出した。パウロをそこから乗船させる予定であった。これは、パウロ自身が徒歩で旅行するつもりで、そう指示しておいたからである。アソスでパウロと落ち合ったので、わたしたちは彼を船に乗せてミティレネに着いた。翌日、そこを船出し、キオス島の沖を過ぎ、その次の日サモス島に寄港し、更にその翌日にはミレトスに到着した。パウロは、アジア州で時を費やさないように、エフェソには寄らないで航海することに決めていたからである。できれば五旬祭にはエルサレムに着いていたかったので、旅を急いだのである。

パウロと弟子たちはトロアスで落ち合った。マケドニア州とアカイヤ州の異邦人諸教会から集めたエルサレム教会への支援金を携えて合流したのである。「週の初めの日」の日曜日、一同は「パンを裂く」主イエスの十字架の死を記念する礼拝を捧げた。パウロはエルサレムに行けば、ユダヤ教徒たちから迫害を受け、殺されるかもしれないと思っていた。惜別の思いを込めて、心を尽くした長い説教をした。あまり長かったので、三階の窓に腰かけて、聞いていたエウティコという青年が眠りこけ、地面に落ちて死んでしまった。パウロが下りて来て、抱きかかえ「騒ぐな。まだ生きている」と言うと、青年は生き返った。皆は喜び、慰められた。夜明けまで、パウロの説教は続いた。

翌日、使徒言行録の著者である弟子たちは船に乗り込み、トロアスからアソスに向けて出港した。一方、パウロは徒歩で、陸路をアソスまで行き、アソスで乗船する指示を与えていた。この時、パウロがなぜ、アソスまで陸路を行ったのかはわからない。アソスでパウロは船に乗り込み、ミティレネに着いた。

翌日、ミティレネから船に乗り、キオス島の沖を過ぎ、次の日にサモス島に寄港した。更にその翌日、ミレトスに到着した。ミレトスはアジア州で最長のマイアンドロス河口にある重要な港町であった。ここで一旦「我ら章句」は終わる。

パウロはコリント書（二）11 章 23 節から 28 節までに、味わった苦労を列挙している。「キリストに仕える者なのか。気が変になったように言いますが、わたしは彼ら以上にそうなのです。苦労したことはずっと多く、投獄されたこともずっと多く、鞭打たれたことは比較できないほど多く、死ぬような目に遭ったことも度々でした。ユダヤ人から四十一つ足りない鞭を受けたことが五度。鞭で打たれたことが三度、石を投げつけられたことが一度、難船したことが三度。一昼夜海上に漂ったこともありました。しばしば旅をし、川の難、盗賊の難、同胞からの難、異邦人からの難、町での難、荒れ野での難、海上の難、偽の兄弟たちからの難に遭い、苦勞し、骨折って、しばしば眠らずに過ごし、飢え渴き、しばしば食わずにおり、寒さに凍え、裸でいたこともありました。このほかにもまだあるが、その上に、日々わたしに迫るやっかい事、あらゆる教会についての心配事があります」。

船での苦勞については「難船したことが三度。一昼夜海上を漂った」「海上の難」と書いている。トロアスからミレトスまでは、4 月頃であったので、穏やかで綺麗なエーゲ海の船路であったろう。パウロは五旬節までにはエルサレムに着いていたかったので、アジア州で時を費やさないように、エフェソには立ち寄らないことに決めていた。

この時、パウロは身に降りかかるであろう迫害に不安と恐れを感じていた。半面、エルサレム教会への支援金を届ける使命に燃えていた。